

## 「シンポジウム」

### 「古典教育のなかの漢文学―教科書と教材の視座から―」

司会・コーディネーター 千葉大学 加藤 敏  
パネリスト 大妻女子大学（非） 木村 淳

北海道教育大学旭川校 大橋 賢一  
埼玉大学 薄井 俊二

### 小学校教科書の漢文教材―問題提起にかえて

加藤 敏

本学会が開催した過去二回の漢文教育に関するシンポジウムの成果をふまえ、今回のシンポジウムでは、わが国の古典教育における漢文の位置づけを総括的に確認し、これからの漢文教育のありかたについて方向性を見いだすことを目指したい。

教育基本法が改正され、前文には「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」と明記され、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和発展に寄与する態度を養う」と定められて、伝統と文化の尊重が



「我が国と郷土を愛する」こととの関連で位置づけられた。その後中央教育審議会の答申に沿って新学習指導要領が告示され、小学校においても古典教育が導入されることとなった。そこでは、古典は、低学年・中学年・高学年の「伝統的な言語文化に関する事項」として扱われ、「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の一環として指導することとされている。

小学校における具体的な古典教材の扱いとその背後にある主な漢文観を挙げると、以下のようになる。

(1) 現代的価値を持つ漢文。現代の問題の構造や解決への示唆がすでに古典（漢文）のうちに典型として示されているとし、現代を知るために漢文を学ぶ。

(2) 倫理道德の涵養・修身に役立つ漢文。漢文には、人類普遍的価値、とりわけ倫理道德上の価値があり、倫理性や道徳性を身につけるために漢文を学ぶ。

(3) 国語の中で重要な位置を占める漢文。国語はあらゆる

る面において漢文と内的な連関があるから、国語にか  
かわる知識、理解を深め、能力を高めるために漢文は  
必須のものである。

(4) 古典としての価値を持つ漢文。古典には無条件に絶  
対の価値があるとする認識に基づき、「我が国の古典」  
であるという理由で、安易に教材化がなされる。

このうち(1)～(3)は、漢文の持つ機能に着目して  
そこに漢文の価値を認めようとするものであり、否定され  
るべきものではない。しかし、かつて「漢文は決して古い  
東洋道徳を教えるためのものではない」(一九五一年「学  
習指導要領試案」)と明確に定められた古典としての漢文が、  
最新の小学校教科書のなかで再び道徳や修身を教える手段  
として無意識のうちに位置づけられていることは、古典と  
は何かの問題、そして明治以降の漢文のアイデンティティ  
の問題との関連において考察されねばならない。

このような機能に着目した漢文観は一方で漢文のテクス  
トの可能性を著しく狭めてしまっているのではないか。  
我々に求められているのは、世界を拓く言語としての漢文  
という視座に立つて、子どもたちが生き生きと享受できる  
ように漢文の世界を立ち上げてゆくことであろう。

(千葉大学)

## 明治期の漢文教科書

木村 淳

明治五年の「学制」では、欧米の教育理念に基づき、実  
学を重視したために、漢文は海外の文化を吸収する手段で  
あったが、教科としては扱われなかった。明治一〇年代に  
入り、欧米重視の風潮が見直され、激化する自由民権運動  
への対策として文部省が教育の場合への干渉を強める中、漢  
文は学校教育課程に組み込まれた。ここでは小中学校用の  
教科書(小学校は一〇年代のみ)をもとに明治期  
(一八六八—一九一二)の漢文教科書の展開について述べ  
たい。

明治一四年、小学校の読書科と中学校の和漢文科に漢文  
の学習が盛り込まれた。そして、教則はまだ具体的ではな  
かったが、小学校用の和文の読本を参照し、難易度と学習  
者の興味・関心に配慮して教材を選択・配列した、今日の  
漢文教科書の原型が複数誕生した。その中には革命や復讐  
などの記述を含むために、明治一三年から始まった文部省  
の教科書の調査によって使用が禁止されたものもあった。

明治二三年に発布された教育勅語は、当初は漢文教育と

の結びつきは弱く、明治二〇年代前半の教科書は他社との違いを出すことに主眼を置いていた。しばらく大きな改革はなかったが、明治二七年三月公布の「尋常中学校ノ学科及其程度」の改正によって、漢文は国語を補うという位置づけとなり、地位が大きく低下することになった。

明治三〇年になると、漢文は様々な分野の語彙を学べる実用性の高い科目であると主張する編者が現れる。練習に漢作文を課す教科書もあったが、漢文を書くことよりも、語彙数を増やして国語の文章力を高めることに実用性を求めたのであろう。この結果、総合的な教材構成の教科書が増えた。さらに、道徳教育・史伝教材偏重であると批判された、中等教育整備のための試案である、明治三一年発行の「尋常中学校漢文科教授細目」への抗議として、一部の教科書は内容の豊富な国語の読本に倣い、総合的な教材構成の教科書を編んだ。漢文教科書の誕生と改革には、国語の教科書が大きな役割を果たしていたことに注意したい。

文部省は三〇年代前半のこうした試みをどのようにとらえていたのか。明治一〇年代の教科書調査が発展して、明治一九年から検定制度が始まった。明治三〇年代では、前述の道徳教育・史伝教材重視の文部省の試案とは異なり、総合的な教材構成の教科書を評価した検定結果も見られる。

検定の基準にはある程度の許容範囲があり、担当者各自の漢文教育観が強く反映されていたことを示している。

明治三五年二月には中等教育初の詳細な教則である「中学校教授要目」が制定され、一応の目安が定まった。漢文科は明治三〇年代前半の議論や編集の試みが結実した内容となっている。しかし、明治三〇年代後半から四〇年代にかけて、儒教道徳による道徳教育こそ中学校の漢文教育の任務であるという風潮になり、教育勅語や戊申詔書（明治四一年）との結びつきが強められ、総合的な教材構成の教科書は姿を消した。明治末期に確立された編集方法は、大正期以降の漢文教科書編集にも引き継がれていた。

（大妻女子大学非常勤講師）

中学校・高等学校の漢文教材について――従来の漢文教材との違いを中心に――

大橋賢一

周知の通り、中学校において二〇一二年から新学習指導要領に則った教科書が使われ始めた。この改訂においては「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が項目として加わったため、古典文学の学習時間がより増加し、教

材も大きく変わると思われた。五社の国語教科書を見ると、『矛盾』、『論語』、唐詩が大きな柱となっており、従来の教材と比べてみると、大きな変化があったとは言い難いものであった。ただ、扱い方に変化が認められるものもあった。

そのうち、目を引いたものとしては、三省堂の三年の教材「中国の古典の言葉」がある。ここでは、『書経』、『漢書』、『後漢書』、『史記』、『論語』というように、経書と歴史書に見える名句が紹介されている。このように名句をまとめて提示するものは従来なかったものである。

とりわけ目を引いたのは、東京書籍三年の「古典の言葉を味わおう」である。ここには、先の三省堂の「中国の古典の言葉」と同じように、古典の名句などが示されているが、『古事記』、『古今集』、『枕草子』といった日本の古典と、『孟子』及び「春宵一刻值千金」（蘇東坡「春夜」）といった漢文とが併記されている。このように、日本の古典と漢文とが併記されているものは従来なかった。

また、教育出版の一年生の教材である「月と古典文学」と題するこの一文は、非常に画期的と思われる。これは、小林一茶の俳諧「明月をとってくれろと泣く子かな」から始まり、月の異名、『竹取物語』、『おくのほそ道』の一文、

阿倍仲麻呂の短歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」、『徒然草』、そして李白「静夜思」が順に紹介されている。

この教材が画期的なのは、日本と中国とを問わず、古典作品に共通して取り上げられてきた「月」を軸としながら、これが古典作品でどのように描かれてきたのかが概観できるように工夫されていることである。例えば、『徒然草』の「桜は満開のときだけ、月は満月のときだけを見るものだろうか。いやそうではない」という一文は、日本人の美観の一つを表したものと考えられる。これは、不完全なものに美を感じる日本人に対して、中国人はどうであろうか、といった問題を提起し得るものである。具体的に言えば、李白「静夜思」に描かれている月は満月なのか、あるいは三日月なのか、こういった問題を考える材料を提起することが可能であろう。このような比較をすることで、漢文だけでなく、日本の古典文学の特色が、より具体的に実感できるようになるに違いない。

そもそも国語科において、漢文教材を取り上げる理由は、無論いくつかあるだろうが、基本的には漢文教材を通して、日本語や日本の古典文学に対する理解を深めるためだと考えられよう。このような意味合いにおいては、これらの教

材に代表されるように、漢文と日本の古典文学とが比較できるような教材が、今後より増えることが望ましかろう。

(北海道教育大学旭川校)

## 教員養成系学部等における漢文教育について

薄井俊二

大学での漢文受講生と、大学で漢文を教えている教員に對して行ったアンケートを中心に報告する。

### 漢文受講者アンケート

埼玉大学教育学部での、二〇一一年度からの三カ年の、漢文の必修科目受講生を対象に実施したものの、計三〇〇名の回答があった。「漢文が好きだったか？」については、「好き」六六%、「どちらでもない」三〇%。「嫌い」は四%に留まった。国語の免許取得希望者であることは差し引かなければならないが、学生たちの漢文への好意度はかなり高いものがある。「漢文が得意だったか？」については、「得意」二〇%程度、「どちらでもない」六〇%。「苦手」も二〇%程度。好意度の高さに比べ、得意度は低いものになっている。つまり、せっかく漢文が「好き」なのに「苦手」にしている層がかなりあることになる。「回答の理由」

を記す自由記述では、「漢字」「文法」「内容」の三つに関する記述が多かった。「漢字についての理解・興味」を深めること、「簡略な文法の仕組み」を示し、理解させること、「豊かな内容の教材」をバランスよく提供すること、が課題となっている。

### 国立大学教員養成系学部アンケート

詳しい報告は別稿に譲り(注)、あらましを述べる。三〇%の大学で漢文を担当する専任教員が配置されていない。中学国語の課程を持たない大学も複数あった。卒業要件として「必修」とされているのは、二科目が半数、一科目しかない大学も二五%あった。一方、卒業論文で漢文を選ぶ学生はほぼ毎年おり、修士論文についても毎年とはいかないがときおり修了生がいる。総じて、漢文を含む古典教育について、厳しい状況にある。一方「漢文を深く学びたい」という学生は少なからず存する。

次に「漢文を通して、何を学ばせるのか」という問いに對しては「故人の叡智に触れ、ひいては己の人生を豊かにする」など、「普遍性の追究」をあげる教員が多かった。また「日本文化に内在化されてきた中国の学問文化に気づき、理解する」という回答もあった。こちらは「日本文化の理解」に力点がある。この問題は「漢文」を「中国語・



中国文化」と捉えるか、「日本語・日本文化」と捉えるかという問題にもつながる。他に発表者は、漢文作品に触れることで、中国と日本（あるいは古代と現代）との違いに気づき、更にその理解を通して、「今」の「日本」を相対化し、自らを省みるという、一種の異文化理解教育につながるものがあるのではないかと考えている。

（注）『国立大学教員養成系学部における漢文教育に関する予備的な調査』について」（本誌所収）

（埼玉大学）